

## 学界動向

### 最近の一八四八年研究(フランス)

平田 嘉三

現代の政治的昏迷と社会的不安とのさなかにあつて、フランスで迎えられた一八四八年革命の百年祭こそは、何にもまして意義あるものであつた。四八年革命に対する新しい関心は、嚴肅な記念祭の施行を契機として、新しい歴史研究のグループを育成し、これらの人々は、四八年革命の本質とその指導者の性格を、新しい視角から示そうとしている。これらの研究は、四八年革命の感傷的追想ではなく、フランス人の現代的関心に応えて、進歩的な史観と新しい方法によつて問題を提起し、その解決に迫るものである。<sup>①</sup>

フランス第二共和国への認識は余りにも遅すぎた憾みがある。即ち、四八年革命は一七八九年の大革命との比較の故に、過去に於て幾分蔑ろにされた傾向があつたが、現代にとつては大革命と同程度の意義を持つのみではなく、否寧ろ二、三の問題については、それ以上に大きな課題を含んでいるといわねばならない。由来フランスの人々は、永き年月に亘つて、政治的社会的論争の基準を八九年の革命の中に求め、大革命の十年間の諸事件の中から、あらゆる種類

の論議を引き出すことに余りにも憤らされていた。歴史家達は八九年に關する龐大な資料を蒐集し、証拠文獻に對しては徹底的な調査を行ったのであるが、四八年の革命に關してはなされたことが少く、歴史家達の第二共和国に對する関心は頗る薄かつたと言わざるを得ない。共和派歴史家のアルフォンス・オーラルも、アルベール・マテも四八年革命の代弁者としては何も書いていない。それはフランスの共和主義者達が、不名誉な四八年革命よりも、フランス大革命の光榮に立ちかえることを望んだからである。又王政主義者の中には、第二共和国について二、三の優れた歴史を書いた人もあるが、四九年の祖先達に向つてイポリット・テーヌが行つた様な、峻烈な揶揄と諷刺とを四八年の人々に對しては行つていない。蓋し彼らは、四八年のメモリーゲームとトラブルすることを、少しも深しとしなかつたからであらう。<sup>②</sup>

① ソルボンヌ大学ルイ・リアール講堂で、同年三月三十日より四月四日まで行われた研究発表と討論とは、二月革命百年記念國際歴史学会の記録として *Actes du Congrès historique du Centenaire de la Révolution de 1848*, P. U. F. に纏められてある。

② しかし四八年革命研究の不振の中にも、二、三の注目すべき歴史家があつた。王政派のヴィクトル・ピエール (Victor Pierre) とピエール・ド・ラゴルス (Pierre de La Force) は、第二共

共和国に対する冷酷な批判家であるが、エミールは「一八四八年共和国史」(Histoire de la République de 1848, 2 vols. Paris, 1873-78)の中で、ブルジョワ共和主義者の政權維持の不成功を衝き、彼らが運命的に新制度を擁護する能力に欠けていた事を指摘している。その後十年を経て、「フランス第二共和国史」(Histoire de la Second République française, 2 vols, Paris, 1887)を世に問うたラゴルスは、「四八年の共和主義者は、ルイ・ナポレオンの独裁への道を準備する為に立憲制度を倒し、折角の進歩的な立憲政治を破滅せしめる結果を齎したに過ぎないではないか」と鋭く批判している。

これに対して共和派歴史家は敢て応酬してはいないが、アルフォンス・ド・ラマルチエヌや、ルイ・ブランなどの革命参画者は、夫々四八年革命史を残している。一般に共和派歴史家の態度には次の五点にその特色がみられる。(1)フランス大革命の叙述を通して四八年革命を弁護する。(2)フランスの通史の中に、四八年革命に対する自己の見解を織り込む。(3)四八年の人々を彼らの先輩として認めはするが、名譽ある先達者としては見ていない。(4)四八年の人々の努力の不足に対しては同情的で、むしろ七月王国の制度の弊害や、ルイ・ナポレオンの悪辣な陰謀を強調する。(5)第二共和国の人々に対する確乎とした批判の基準を持たないこと、及びブルジョワ共和主義者と社会主義者の和解の試みに何れも失敗していることなどである。かかる人々の中には、エミール・ブルジョワ(Emile Bougeois)やガブリエル・ブントー(Gabriel Hanotaux)や、熱心な研究家であるシオルジュ・ワニール(Georges Weil)などがある。

学界動向 最近の一八四八年研究(フランス) (平田)

エール・ブントー (Gabriel Hanotaux) や、熱心な研究家であるシオルジュ・ワニール(Georges Weil)などがある。

社会主義歴史家としては、ジャン・ジョンス派のジオルジュ・ルナル(Georges Renard)が見られるが、彼はマルクスの「フランスにおける階級闘争」『ブリュメール十八日』に従つてはいるが、唯物論的決定論者というよりは、むしろ改良主義的社会主義者としての道德主義が顯著である。その著「一八四八年共和国」(La République de 1848. (1848-1852) "Histoire socialiste (1889-1900)" ed. J. Jaurès, vol. K, Paris, 1907)では、ルイ・フィリップとルイ・ナポレオンの攻撃非難に終始しているが、四八年六月のバリカードに就て、労働者支持という明瞭な立場をとつてゐることは注目すべき点である。その他戦前の研究論文、単行本については、その主なものを末尾に記しておいた。

◆ ◆ ◆

四八年革命の百年祭に当つて、「百年記念国家委員会」の後援の下に、二十数冊に及ぶ「一八四八年革命百年記念叢書」(Collection du Centenaire de la Révolution de 1848, P. U. F. 1948)が刊行された事は周知の通りである。ジャン・ブリュナフ(Jean Bruhat)やジャン・カソー(Jean Cassou)や、テルゼン(E. Tersen)や、シルヴァン・モリニエ(Sylvain Molinier)や、ロベール・シユネルブ

(Robert Schnerf) / J. L. Puchel / オーギュスト・ホルニエ (Auguste Cornu) / シュニツェット (Ch. Schmidt) / ガストン・マルタン (Gaston Martin) / ジョルジュ・デュヴォー (Georges Duveau) 等何れも著名な歴史家であるが、その史観、方法が必ずしも同じであるわけではない。しかし初期の共和派史家と比較して、何れも革命の理解に於て著しく異つたものを持つておるが、概括すれば次の如き諸見解にその特色を持つてゐる。(1) 四八年革命は本質的に社会革命 (La révolution sociale) であり、(2) 大衆の物質的境遇の改善運動であつた。(3) 市民的自由の確立、普通選挙 (le suffrage universel) の実現、奴隸制度の廃止 (l'abolition de l'esclavage) 等は表面的にスローガンであつたにすぎない。(4) 四八年革命はブリの「六月暴動の敗北」を以て終末を告げることが主張する。従つて六月以降の第二共和制及びルイ・ナポレオンのターテター等には少しも興味がなく、専ら六月革命時のブリの労働者の活動の描写と、空想社会主義者、種々共和主義者の非難に多くの頁を費している。四八年革命の新史観を一口で言えば、「社会革命史観」と言えるであらう。

③ 叢書中、ジャン・カスノーの「一八四八年の人々」(Jean Cassou: *Le Quarante-huitard*) にしては後述の若干ふれるが、広島大 学 謙井鉄男氏が、「史学研究」(第九集、四七号、六九頁)で既

に紹介されている。コレクシオンについては末尾の文献欄を参照された。

さてかくの如き共通の傾向性には、マルクスの「フランスに於ける階級闘争」(「ブリュメールの十八日」)やエンゲルスの「ドイツに於ける革命及反革命」の影響が顕わではあるが、二、三のものを除いてはマルクス、エンゲルスの定式化した史観を脱して、独自の革命の解釈を下していることは看過し得ない。その最も代表的な史家は、ポルドー文科大学の近世史講座担当のガストン・マルタン教授であらう。

教授はフランス大革命史の研究にも赫々たる業績を残しているが四八年革命史についても、「フランスの植民地に於ける奴隸制度の歴史」(Histoire de l'esclavage dans les colonies françaises, in-8°; Coll. "Colonies et Empires, P. U. F., 1948) / 「奴隸制度の廃止」(L'abolition de l'esclavage, in-8°; Coll. du "Centenaire de la Révolution de 1848" P. U. F., 1948) / 「一八四八年革命」(La Révolution de 1848, in-8°; Coll. "Que sais-je?" P. U. F., 1948) 等を相次いで發表した最も權威ある四八年革命史家といわれている。「ジャコブス」(Des Jacobins, in-8°; Coll. "Que sais-je?" P. U. F., 1949) と共に、我が国にも輸入されて問題になつてゐる「一八四八年革命」は、分析的というよりもむしろ物語風の歴史で、

第二共和国に対して激しい非難攻撃も、寛大な礼讃もしない。正統派共和主義者の歴史に近いが、革命の本質の把握については明かにマルクスの影響を受けている。すなわち、「革命は、実際には、普通選挙権の政治的獲得というよりは、全く他の或るものに骨折つた社会革命であつた。しかしこの革命も本質的には敗北に遭遇した。それは指導者が革命の社会的性格を理解しなかつたか、或は認めることを欲しなかつたからである」(p. 116)と。更にファール伯爵

(Comte de Falloux 議会に於ける僧侶派の長)を悪党の頭と断じ、「人民の勝利は、カソリック反動と保守的ブルジョワジー及び空想的政治屋の三者同盟によって屈服した」(Ibid.)として、カソリック反動勢力の革命的役割を重視している点は注目すべきである。しかしマルタンの穩健な四十八年研究にも勝つて、四十八年革命の本質、臨時政府の対人民政策の失敗、六月革命の意義、十二月革命の指導理念等をより進歩的立場から明にした歴史家として、ソルボンヌ大  
学名譽教授ジョルジュ・ルフェーブル(Georges Lefebvre)氏と、  
大学教授資格者ジャン・ドートリ(Jean Dautry)氏がある。

ルフェーブル氏が四十八年革命についても甚だ造詣が深いということは、我が国では余り知られていない様である。「一八四八年二月二十四日」(Le 24 février 1848, Revue de la Révolution de 1945)の名論文をはじめ、「百年祭にひびく」(A propos d'un Centenaire)

学界動向 最近の一八四八年研究(フランス)(平田)

naire (1848) Revue historique, 1948) 又未發表ではあるが、「七月王国」(La monarchie de Juillet)、「第二共和国とルイ・ナポレオン・ボナパルト大統領」(La seconde république et la dictature de Louis-Napoléon Bonaparte) 等があり、ドートリの「フランスの一八四八年革命史」の序文にも筆を執っている。ルフェーブル氏の四十八年革命研究上の主要課題は、二月革命及び十二月革命に集中されるが、その論点は、(1)二月革命は階級闘争の色彩を持つ社会革命である(この点はマルタン教授と同意見)。(2)六月騒乱及び十二月クーデターにおける共和派の錯誤は、プロレタリア恐怖の意識過剰による。(3)臨時政府の対人民政策の失策は、機会主義的弥縫策(同教授はレアリズムという)にあるというにある。

一八四八年は、奴隸解放と普通選挙の実施によって注目されるという点では、確に銘記すべき年ではあるが、むしろ二月革命の社会的光景が、歴史の見透しの裡に最も意味あるものを持つ、という点に興味がある。換言すれば二月革命の本質が社会革命であつたという事に注目するのであると。一七八九年七月、大革命の勝利後の第三階級の分裂、一七九三年の宣言、以後の相続いた反動によつて、我々には階級闘争(La lutte des classes)が、近代史の重要な因子の様に見える。かかる意味に於て二月革命が社会革命を志向していたと見られねばならない、とルフェーブル氏はいふ。次に、

四八年六月及五二年の選挙に於けるブルジョワ共和主義者のプロレタリアに対する態度は、余りにも恐怖の念に支配され過ぎて、却て軍人独裁への道を自ら切り開いた結果を招いた。実際にはブルジョワジーの危機は差迫つたものではなかつたし、資本主義経済は未だ発芽の段階であつて工場労働者数は少く、且つ分散的、無機的で、その全勢力を結集しても、政局を左右する程の力にまで成長していなかつた。勿論パリには、バブーフの流れをくむブオナロチ(Bonarroti)等の若干のコミュニストは存在したが、ブルジョワジーの労働者恐怖意識の過剰は、政権をルイ・ナポレオンに奪取されるという破目に陥つた、と教授は説く。又政府に課せられた当面の義務は、経済の復興と失業者の合理的援助の組織化であつた。ラマルチヌとその同僚は、一七九三年三月二十六日、バールでジャンボン・サン・アンドレ(Jeanbon Saint-André)が書いたといわれる、次の警句を考へた。「もし諸君が革命を完成する為に、彼らの援助を受けようと欲するならば、是非とも貧乏人を強制的に生かさねばならぬ。」しかし臨時政府には人民に対応すべき確乎とした根本方針がなかつた。政府は、市民の養生、武装化、アッシニヤ紙幣の救済等を無計画に行う弥縫策(T'expédient)のみしか持たなかつた。この悪い意味のリアリズムが、四八年の政府を誤らしたのである。十八世紀の革命家は、確に実験的理性主義(Rationalisme

experimental)に貫かれていたが、四八年の革命家は、能弁(eloquence)と抽象論(métaphysique)とに身を委ねた。観念的無計画性と恐怖過剰とが、共和政府を破壊に導いた原因であつた、と教授は結論している。

同氏の諸論文にもまして、人民大衆の視角から革命を批判し、現代の諸問題に多くの示唆を与えている書物は、パリのイエール・エ・オージュルドエイ杜から、一九四八年に出版されたジャン・ドートリ氏「フランスの一八四八年革命史」(Jean Dautry: Histoire de la Révolution de 1848 en France, Paris, Edition Hier et Aujourd'hui, 1948)である。<sup>④</sup>

④ 「フランスの一八四八年革命史」の内容は次の通りである。

序言

第一章「革命の諸起源」 第一節「七日政体」第二節「一八四七年の政体の危機」第三節「ギゾー攻撃」。

第二章「革命への上昇期(一八四八年二月二十二日—五月十五日)」 第一節「二月革命」第二節「臨時政府の成立」第三節「人民運動」第四節「臨時政府の業敵」第五節「人民武装と民主的選挙」第六節「四月二十三日、二十四日の選挙」第七節「憲法議会と執行委員会」第八節「パリの人民の議会侵入」

第三章「一八四八年六月の教日より、十一月四日の立憲まで」。

共和反動」第一節「二月の人々及其の仕事への攻撃」第二節「六月の數日」第三節「非常識な共和主義ブルジョワジー」第四節「一八四八年十一月四日の憲法發布」ルイ・ボナパルト王政反動（一八四八年十二月十日—一八五〇年夏）第一節「一八四八年十二月十日、十一日の統領選挙」第二節「憲法議會の断末魔（一八四八年十二月二十日—一八四九年五月二十六日）」第三節「立法議會」第四節「新しい共和派の敗北（一八四九年六月十三日の終日）」第五節「大統領と一八五〇年の反動的諸法律」

第五章「一八五一年十二月二日のクーデター」第一節「一八五〇年中のフランス国民」第二節「ボナパルト党の形成」第三節「クーデターの諸豫備行為（一八五〇年秋、一八五一年夏）」第四節「一八五一年十二月二日のクーデター」第五節「共和派の抵抗」

### 結語

ドートリ氏は、六月革命の意義及び十二月革命の指導理念を通して、プロレタリアが如何に四八年革命を觀察し、又現代の諸問題、就中、保守反動主義者の術策に対して、如何なる態度で臨むべきかを暗黙の裡に教示している。ルフェーブル氏がその序文で紹介している様にドートリ氏は常に読者を意識しつつ、話上手に語る。(1)著述に際して注意深く、責任感と義務感とに満ち、(2)雑多な事件の諸關係の

学界動向 最近の一八四八年研究（フランス）（平田）

分析及綜合能力に秀で、又(3)悲惨な現実の描写に妙であるばかりでなく、(4)特色ある表現を自由に駆使する諸点に卓越したものである。さてドートリ氏は、ブルジョワジーとプロレタリアとの關係について、二月革命から六月革命に至る間のブルジョワジーの奸策を指摘し、六月革命の敗北の意義に鑑みて、プロレタリアの今後留意すべき点を次の如く述べている。

フランスの一八四八年は、一般に社会的國民的協和の喜ばしき情景を想起せしめる。確にかかる情景は存在したが、決して永續されるべきものではなかつた。むしろ本質的には、共和国の祭壇に捧げられた悲惨なプロレタリアの事件でしかなかつたのである。ルイ・フリップの統治時代の末期には、何人も次の革命が社会革命であることを疑わなかつたし、又プロレタリアの強力な發言権が、かれらの手に獲得されるであろうことを期待していた。併し事實は全く裏切られた。ブルジョワ共和主義者や、多かれ少かれ革命に参加した職人層は、卑怯にも労働者を前面に追いやり、彼らは表面にあつて専ら自己の犠牲を極力拒否し、漁夫の利を得ようと画策したのみか、政權確立後のブルジョワ共和主義者達は、革命の実質的原動力であつたプロレタリアのあらゆる行動に対して、神經過敏と思われるまでに、峻厳なる批判と制肘とを加えたのであつた。今や王政下で「民主主義」を唱えた共和主義者達は、共和制下では「反社会主義

論」を、「社会主義」標榜のプロレタリアは、「反民主主義論」を押し進めざるを得なかつた。一体これは、どういふわけか。マルクスやエンゲルスによつて明らかにされているが、富裕な土地ブルジョワジー（bourgeoise riche en terres）と土地封建制度（féodalité agraire）の勢力は、大革命の進行中、巨大な国家財産を買収し、急速な発展と、絶えざる闘争を通してブルジョワジーを圧迫した。かかる事情下にあつてブルジョワジーは彼らの敵と闘ふ為に、プロレタリアを同盟者として利用して来たに過ぎない。併し又他方、労働者数の過少と、彼らの自治能力の欠如とが齎したプロレタリアの自主性の欠如が、共和主義者の乗ずる間隙を与えた事も看過するべきではない。六月革命の數日は、正に共和政府の勝利であり、プロレタリアの完全な敗北であつたと。

ドートリは六月革命の意義を、マルクスの言葉、「そこで我々はさげふ、革命は死せり！——革命万歳！」の中に、読者が賢明に看取される事を望んでいる。されどドートリが強調してやまない他の点は、四八年から五二年に至る諸革命の指導理念が、如何に革命的であつたかということである。一八四八年三月一日「兩世界雜誌」(La Revue des Deux Mondes) が掲載した一文を引用しつつ、フランスは絶えざる政治的実験に供せられている。その実験とは、「秩序」(ordre)の維持に於てであり、如何にして秩序を保全す

るかという点に、諸革命の指導理念がかかわつてゐるか、である。その例を特にルイ・ナポレオンの諸政策、就中、(1)カヴェニヤックの釈放 (2)法令その他の諸政策 (3)ブルードンの誤謬の中に求め、秩序の理念とその與に潛む反動のからくりを、鋭利な分析力を以て説明する。

ゼネラル・カヴェニヤック (General Cavaignac) が牢獄にあつて、許嫁マドマゼル・オディエ (Mlle Odier) との結婚準備を、秘かに進めている事を知つたルイ・ナポレオンは、特に、彼を特赦の恩恵に浴せしめた。モルニ (Morny) 曰く、「大統領は私に次の事を言つた。秩序が回復されたからカヴェニヤックの自由をとりもどしてやりたいと。大統領は、將軍が社会、法、秩序とに反した偉大な功績を忘れはしなかつた」と。すなわちルイ・ナポレオンは、秩序回復の故に、秩序をかつて將軍が保全せる故を以て、釈放したのである。又秩序維持の政策実施は、(1)一八五二年一月二十二日のオルレアン家財産没収令第六條、「一千万フランは、大都市の工場労働者住宅の建設に用う」によつて労働者の不平を封じた。(2)一八五二年二月二十八日の不動産銀行 (Crédit Foncier) 設立の法令は、農民への呼びかけであつた。(3)一八五二年三月三日の、フランス銀行 (La Banque de France) の割引率 (le taux de l'escompte) の引下げ (4%から3%) の法令は、中小企業家を満足させた。その

他 (4)労働者の雇傭対策 (5)地主と産業資本家の間に生じた利害関係の裁定 (6)賃金の調定 (7)分裂した諸階級の融和と平衡回復等に見られ、ナポレオンのこの社会政策のサンスの良さが、統領政治成功の因をなしたのではあるが、この「秩序」の奇怪な字句こそ、プロレタリアにとつては警戒されねばならないと、ドートリは、ブルードンの場合を例にあげている。

或る題名の附けられた一冊の本に——この本はフランスの共和主義者や社会主義者を驚かせ憤激せしめた。——クーデターが終つた後に、ブルードンは次の様に書いている。「我々の時代は社会主義に満ちている」。なんとすれば、「十二月二日の意義と再提出された理念とは、真面目に言つて極めて革命的である」というのは、「ポナバルトは八九年のイデーに基いており、そこには革命がある」。更に「ポナバルトは、国民に約束したすべてのものを実行した」、「フランスは実践的革命を持つ、この革命を、私は人民の同意によつて引き上げる。私に賦課された任務はそこにあるのだ」と。ドートリは即座に、「馬鹿げた事だ」、「十二月二日は、断じて、革命の道の前進信号ではない」と怒りをこめて強く否定する。そして更に筆をすめて、ドートリはポナバルト政策の真実を暴く。すなわち、ルイ・ナポレオンは秩序維持の為に、社会政治の箔を輝かすことに努力し、有産階級の軽い犠牲を請願しつつ、プロレタリアの平

穩を保たんとした。彼はプロレタリアの利益に奉仕したのではなくて、支配階級の権力と、その秩序維持との為に、清算人として、安価に、人民を欺いて、革命家らしく装うたに過ぎないと。

六月革命の共和主義者の背反行為と、十二月革命の欺瞞を論じて、われわれはこの歴史的事実を、「死物」にしてはならないという。現在、世界に提出された諸問題は、一八四八年の諸問題とあらゆる關係を持つている。「すべての自由を失ふことはいともやさしいが、われわれは自由を守り、且つ、自由の為に今や闘わねばならない」。もしポール・ヴァレリ (Paul Valéry) の言葉を借りるならば、「文明の死滅は、文明自身をもつともよく知つている。だが資本主義の財産を維持する為に、独裁者候補がたやすく発見されるではないか」。しかし、一八五一年の十二月に、最善を尽して戦つた確乎たる力強き人民、ミシェル (de Bourge Michel) のいう、「見えざる番兵」(sentinelle invisible) が、われわれのうちにある」と結んでいる。ドートリの三七〇頁に及ぶ「フランスの一八四八年革命史」は、かなり主観性の強い政治的色彩を持つたものではあるが、戦後のマルクス主義の影響を受けた新しい研究の代表的なものとして、単に学界にとどまらず、多くの人々の間で問題になりつつある様に見える。

既述のマルタン氏、ルフェーブル氏、ドートリ氏の著書が、最も



すぐれた代表的四八年革命研究といわれるが、その他著名な二、三人の論文も看過し得ないものがあるので、簡単にその特色を述べてみたい。

「百年記念叢書」の入門書として、最も興味深く且示唆に富んでゐるものは、ジャン・カソーの「四八年の人々」(Jean Casson : *Le quarante-huitard*, Paris, P. U. F. 1948, pp. 51) であろう。彼はリスト音楽のロマンチックな手法で、四八年の人々に、ラブソング的な評価を与えており、而も一九四八年のショスタコヴィッチ (Shostakovich) の陪音に触れる事を、決して忘れなかつた。カソーの現代的関心の深さと広さが、充分にうかがわれる力作といわねばならないが、「一八四八年の人道主義的英雄」の祝賀式に、カレント・ニュイタールの中で、最もすぐれた代表の一人として、カール・マルクスを迎えていることが、甚だ奇抜で面白い。(p. 45 ~ p. 46)

「一八四八年二月の数日」[*Jan Bruhat : Les journées de février 1848*, Paris, P. U. F. pp. 75, 1948] の著者ジャン・ブリュアは最も洗練されたマルクス公式主義者であるが、(1) 大衆の革命意思が純粹な社会革命に志向されていた、とし、(2) 六月の衝突事件の不可避性と、労働者の敗北の宿命を説く点に於ては、ルフェーブブルヤードトリと全く酷似してゐる。

フランス大革命研究の、尊敬すべき学者として著名なシャル・シュミットは、六月暴動と国立工場について主として執筆しているが、(Charles Schmidt : *Des ateliers nationaux aux barricades de Juin*, Paris, P. U. F. pp. 67, 1948) 国立工場に惹起した不祥事件を、プロレタリア弾圧の口実にした臨時政府のやり口を糾明し、「無智と恐怖との為に、……社会の根本的改革をなし得なかつた政府に重大な責任がある」(p. 6) ときめつけた慧眼は、高く評価されるべきであらう。

臨時政府の外交関係を記述した注目すべき一書は、E・テルゼンの「臨時政府と欧州（一八四八年二月二十五日——五月十二日）」[E. Tersen : *Le gouvernement provisoire et l'Europe*, (25 février-12 mai 1848), Paris, P. U. F. pp. 77, 1948]

である。彼は革命の敗北の原因を、ヨーロッパとの関係、就中、「革命と戦争」との間に観察し、臨時政府が、国内の大衆に対する恐怖の故に、国民軍を隣国に派遣しなかつた点を強調し、外務大臣ラマルチヌの決断が、フランスの革命を阻害した因であつた事を指摘した。(p. 75) 注目すべき問題作である。

又アメリカに於ける四八年研究は、漸次盛んになつてゐるが、史的立場から書いているウイリスコンシン大学のポール・ファーマの著作 (Paul Farmer : *Some Frenchmen Review 1848*, J. of

Mod. Hist. december, 1948)や、シカゴ大学のハンス・ロスフェル  
ク *Q. Q.* (Hans Rohrls: 1848 One hundred years after. J. of  
Mod. Hist. december 1948)も、看過すべきではなす。アメリカ  
的研究の典型として興味深いものは、プリンスストン大学のプリシル  
ラ・ロバートソンの「一八四八年革命、社会史」(Priscilla Robe-  
rson: Revolution of 1848, A social history, 1952) である。

この書物はフランスに限定されたものではないが、(1)その周密な方  
法論と、単純な公式論排除の態度とは高く評価されていい。特に(2)  
社会主義と国民性の問題、又政治力と経済民主主義との関係をと  
りあげた新鮮な感覚は、賞讃されるべきである。

その他、ドイツ、イギリス等に於けるフランスの四八年革命研究  
はよくわからないが、イタリヤではかなり行われている様である。

我が国では、元九州大学教授長寿吉氏以後、多くはなされておらず、  
わずかに、佐賀大学の西海太郎氏の「フランス現代史、昭17・四海  
書房」同「フランス現代政治社会史、昭28・三笠書房」慶応大学  
の鈴木泰平氏の「概観仏蘭西史、昭18・三笠書房」、C・セニョー  
ボス、福永・新関氏訳「フランス民主主義発展史、昭26・月曜書  
房」、東京大学の林健太郎氏の「十九世紀の諸革命」(社会科学講座  
巻4所収)昭26・弘文堂」があるのみで、われわれは一つの有力な  
手がかりとして、マルクス選集刊行会訳「フランスにおける階級闘

争(マル・エン・選集巻5上)昭26・大月書店」同「ルイ・ボナパ  
ルトのブリュメール十八日(同上の巻5下)昭26・大月書店」を参  
考にしている程度である。我が国ではまだ戦後の新しい学界の動向  
が紹介されておらず、又論文も發表されていない。唯、既述の如く、  
讚井氏の「カレント・ユイタール(ジャン・カスー)」の紹介があ  
つたことである。

⑤ 四八年革命の一般的研究の他に、人物評論が多いのは特色であ  
るのでその二、三を紹介する。

ロベール・シュネルプの「ルドリュ・ローラン」(Robert Sch-  
nerb: Ledru-Rollin, Paris, P. U. F. pp. 75, 1948)は、善意  
と才能の持主としてのローランが描かれているが、特にローラ  
ンが、共和国に対する富裕階級の反動に対して、はつきりとし  
た分別をつけることに成功している点を、シュネルプは強調し  
てゐる。(P. 74)

ルイ・ブランを悪評してゐるものに、ジャン・ウイダランズの  
「ルイ・ブラン」(Jean Vidalence: Louis Blanc, Paris, P.  
U. F. pp. 68, 1948)がある。彼はルイ・ブランの社会問題解  
決策が時代遅れのものであることを述べてゐる。(P. 68)

エドワード・ドレアンとジャン・ピエーシは、「ブルードンと四  
八年革命」(Edouard Dolléans et J. I. Puch: Proudhon  
et la révolution de 1848, Paris, P. U. F. p. 77, 2948) 中  
で社会制度改革の体系的理論の鼓吹者としてよりは、道德家

としてのブルードンを描く。社会主義的共和国の代弁者としてのビュシエを紹介しているアルマン・キューヴィエの「ビュシエとキリスト教社会主義の起源」(Armand Cuvielier : P. J. B. Ruche et les origines du socialisme chrétien, P. U. F. pp. 83, 1948) は、彼の社会思想を若干明かにしているが、教育関係のことについて、その究明が甚だ不十分である。

一八四八年の人々の中で、ブランキ程魅惑的な人はなかつた。革命家としての確乎たる信念と、その行動とについて詳細に述べられてゐる書物に、シルヴェン・モリニエの「ブランキ」(Sylvain Molinier : Blanqui, Paris, P. U. F. pp. 70, 1948) がある。

オーギュスト・コルニユの「カール・マルクスと一八四八年革命」(August Cornu : Karl Marx et la Révolution de 1848, Paris, P. U. F. p. 80, 1948) は、マルクスとエンゲルスの活動、パリの人民が悲劇的英雄として起ち上る状況、穩健共和主義者の反動的な行動等を書き、且「社会主義的共和国」の運動の失敗の理由を説明してゐる。



戦後、就中、四八年革命百年記念祭を契機として起つた、新しい四八年研究の特色は、大戦後の政治的社会的時代性と、フランスの国民性とを著しく反映したマルクス主義的、しかし独自の史観と方

法との上に立つ、共同研究の色彩濃厚な、最も新鮮な研究という点にあると言えるであらう。記念祭以降も、新しい研究成果が発表されており、而も百年祭を記念して、雑誌「一八四八年と十九世紀の諸革命」(季刊) (1848 et les Révolutions du siècle XIX (1948-1953)) が刊行されている事は、将来の研究に明るい希望を与えるものである。現実の政治的社会的課題に応えるものとして、より周到に準備され、史実により忠実に、検討が加えられたこれらの研究が、更に一步進められて、本格的事業としての研究にまでに高められる事を切望するのは、独り私のみではなからう。その前提として、新しい諸研究に対して、次の二、三の事が再考慮されなければならぬ。すなわち、(1) 一つの固定した大前提的仮説—社会発展の必然的方向性及び進歩と保守とについての不変の一方的評価—の、絶えざる反省の要なきや。(2) イギリスとの比較に於て、フランスの産業革命前に爆發した四八年革命が、何故にチャーティスト運動より早く起り、失敗し、又産業革命後に、より強力な革命が再現されず、且つ成功しなかつたのであるか。(3) 革命家達は、如何なる基礎の上に立脚せんと欲し、如何なる理論と基盤の故に失敗したのであるか。

その他に、戦後に発表された一八四八年関係の論文、単行本には

1944

L. R. Namier : 1848, the Revolution of the Intellectuals. (London, 1944)

1947

G. Lefebvre : Le 24 février 1848 (Revue de la Révolution de 1848, 1947)

1948

(1) H. Rothfels : 1848, One Hundred Years after [J. of Mod. Hist., december 1948]

(2) J. Renard : 1848-1948 Centenaire de la Liberté [R. d'hist. des Col. fr., t. XXXII, 1948]

(3) L. Groulx : Un débat parlementaire en 1849. [R. d'hist. de l'Am. fr., décembre 1948]

(4) M. Handelsman : L'année 1848, revue des problèmes internationaux (du point de vue polonais) [Przeg hist., 1948, t. XXXIII]

(5) R. Cessi : Aspetti della reazione europea nel 1849. [Acc. naz. Lincei Rendi Conti, vol. III, fasc. 11-12, novembre-décembre 1948]

(6) W. Jakóbczyk : Cieskowski et la Ligue polonaise, 1848-1850. (en Prusse) [Przeg hist., 1948, t. XXXIII]

(7) A. de Curzon : Le Consulat de France en Écosse de 1815 à

1853. (Rev. Hist., dipl., 1948)

(8) Deux siècles d'Alsace française, 1648-1798-1848. Strasbourg-Paris, (F.-X. Le Roux, 1948)

(9) J. B. Duroselle : L'attitude politique et social des catholiques français en 1848. (R. d'hist., de l'Egl. de Fr., 1948)

(10) G. Michel : Le Pasteur Honoré Michel et la reconstitution de l'Église réformée de MontPELLIER après la crise révolutionnaire. [Bull. hist., et lit. de la Soc. de l'Hist. du prot. fr., Octobre-décembre, 1948]

(11) Ch. H. Pouthas : Démocratie et Capitalisme. (Peuple et Civilization, XVI, 1948)

(12) E. Dolléan : Proudhon (Callimard 1948)

(13) L. Paurat : La manifeste Communiste de 1848 et le monde d'aujourd'hui. (1948)

(14) J. Gesztesi : La révolution de 1848, Vue par les témoins. (1948)

(15) H. Lardas : 1848, une révolution. (1948)

(16) J. L. Dubreton : M. Thiers ("Grandes études historiques" 1948)

(17) Ch. Pomaret : Monsieur Thiers et son siècle (Leurs figures, 1948)

(18) A. Soboul : Les Troubles agraires de 1848. (1948) 1949

- (1) H. Forester : Entre deux révolutions (1800-1848) Les "Droits réunis" et l'agitation politique. [A. de Bourq, janvier-mars 1949]
- (2) T. Beregi : Chronologie de 1848. (Révolution française et hongroise) [1848, mars 1949]
- (3) H. Chobaut : La Commission du travail de Vauchuse [ibid.]
- (4) H. Pertoin : Le service des postes en France avec Étienne Arago. [ibid.]
- (5) E. Tersen : Documents sur la mort de Mgr Affre. [ibid.]
- (6) M. Dommanget : A propos de la mort de Mgr Affre. [1848, Juillet 1949]
- (7) A. Fortin : Frédéric Degeorge, Commissaire du Gouvernement provisoire dans le pas-de-Calais, 28 février-8 juin 1848. [R. du Nord, 1949]
- (8) G. Bourgin : De quelques sources récentes relatives à l'histoire de 1848. [1848, juillet 1949]
- (9) H. Forestier : Le mouvement bonapartiste dans l'Yonne en 1848. la presse et l'opinion. [A. de Bourq, avril-juin 1949]
- (10) E. Tersen : Réflexion sur l'abolition de l'esclavage. [1848, juillet, 1949]
- (11) Aux origines de l'abolition de l'esclavage. (documents) [R. d'hist. des col., 1949, 1er trim]
- (12) F. Barghoorn : Russian Radicals and the West European Revolutions of 1848. [The Rev of Politics, juillet 1949]
- (13) G. Bourgin : Le Comité central démocratique européen (en 1850) [1848, juillet, 1949]
- (14) A. Lefebvre : Chemins de fer et politique sous le Second Empire. [ibid.]
- (15) G. Vuillemin : Un pionnier de Mauritanie, le commandant Ferejean. [R. d'hist. des col., 1949, 1er trim]
- (16) Ch. H. Poulhas : Complexité de 1848. [1848, novembre, 1949]
- (17) G. Rougeron : La situation économique et sociale de l'Alsier à la fin de la Monarchie de Juillet. [ibid.]
- (18) L. Machu : L'importance du banquet de Lille dans la Campagne de Réforme (7 novembre 1847) [R. du Nord, s. XXXI, 1949]
- (19) A. Fortin : Frédéric Degeorge, Commissaire de l'edru-Roulin dans le département du Nord en 1848. Charles Delcluze. [ibid.]
- (20) R. L. Tamothe : Documents nouveaux sur la mort de Mgr Affre. [R. d'hist. de l'Égl de Fr., janvier-juin, 1949]
- (21) M. Markovitch : Une grande figure de la Révolution serbe de 1848. Svetozar Miletich. [1848, novembre, 1949]
- (22) J. Bonnardot : La presse alsérienne sous le Second Empire. [ibid.]

- (29) J. P. Van der Linden : L'émancipation catholique aux Pays-Bas. [1848, mars, 1949]
- (30) M. H. Vicairie : Le catholicisme français au XIX<sup>e</sup> siècle. (Annales, juillet-septembre, 1949)
- (31) D. Halesvy : La vie du Proudhon. (1949)
- (32) M. Chevalier : Note sur les usurpations de terres en Couscous au milieu du XIX<sup>e</sup> siècle. [A. du Midi, 1949, nos 5-6]
- 1950**
- (1) A. Dansette : Mac Sangnier et le Sillon. (1950)
- (2) J. A. Thomas : The System of Registration and the Development of Party Organisation, 1832-1870. (History, February and June 1950)
- (3) B. G. Macchioro : Louis Blanc e la rivoluzione e di febbraio (le due rivoluzioni) [Nuova riv. st., septembre-décembre, 1950]
- (4) R. Schnerb : Marx contre Proudhon. (Annales, Octobre-décembre, 1950)
- 1951**
- (1) A. Dominique : La Révolution sociale économique et politique en Europe de 1800 à 1850. (1951)
- (2) J. A. Alba et Ch. H. Pouthas : L'époque révolutionnaire. (1789-1851) (1951)
- (3) J. Lucas-Dubreton : Lamartine. (1951)
- (4) E. Vellay : L'impopularité de Lamartine peu après l'ouverture de l'Assemblée Constituante. [1848, mai 1951]
- (5) S. Mastellone : L'escadre française et les événements révolutionnaires de 15 mai 1848 à Naples. (Ibid.)
- (6) G. Bourgin : Balzac et la révolution de 1848. (Ibid.)
- (7) A. Chatain : Les émigrants temporaires et la propagation des idées révolutionnaires en France au XIX<sup>e</sup> siècle. (Ibid.)
- (8) G. Edgar-Bonnet : Ferdinand de Lesseps Triomphe. (R. des D. M. 15 janvier 1951)
- (9) A. Dansette : Léon XIII et le Ralliement. [R. de P., mars 1951]
- (10) A. Dorpalen : Tsar Alexandre III and the Boulanger Crisis in France. [J. of Mod. Hist., juin 1951]
- (11) P. H. Beik : Abbé Maury and the National Assembly. [Proc. Am. Philos. Soc., X CV, no. 5, 1951]
- (12) B. M. Guetzévitch : L'évolution du régime parlementaire depuis la Charte jusqu'en 1939 [Bull. Soc. d'hist. mod., juin-juillet, 1951]
- (13) J. L. Puech : L'idée féministe en 1848. (Internat. d'hist. polit. et const., juillet-décembre, 1951)
- (14) G. Lecompt : Trois fraternelles da la région Nilloise en 1849. [Rev. des révol. contemp., Dec., 1951]
- (15) R. G. Bibliographie critique : Littérature de Coup d'Etat.

- (ibid.)
- (16) M. Dessal : Le complot de Lyon et la résistance au coup d'état dans les départements du Sud-Est (ibid.)
- (17) Etude collective (suite) E. Lyon, citer épublicaine. [Rev. des révol. contemp., Dec., 1951]
- (18) G. Duveau : Protestantisme et prolétariat en France au milieu du XIX siècle. [Rev. d'hist. et de philos. relig., no. 4, 1951]
- (19) J. B. Duroselle : Les débuts du Catholicisme social en France. (1822-1870) [Paris. P. U. F. 1951]
- (20) P. Dominique : Louis-Napoléon et le Coup d'Etat du Deux décembre. (Stelt, 1951)
- (21) F. A. Simpson : Louis Napoleon and the Recovery of France. (1951)
- (22) Le Fuye, M. de et E.-Al. Babean : Louis Napoléon Bonaparte avant l'Empire. (1951)
- (23) F. G. Dreyfus : l'industrie de la verrerie en Bas-Languedoc de Colbert à la Révolution industrielle du XIX<sup>e</sup> siècle. (Ann. du midi fasc. I, 1951)
- (24) Leo Gershey : Three French Historians and the Revolution of 1848. (Tamartine, Louis Blanc, Michelet) [J. of the Hist. of Ideas, janvier 1951]
- (1) R. Annand : La Deuxième République et le second Empire. (Hachette, 1952)
- (2) J. Plametta : The Revolutionary Movement in France. (1815-1871) (1952)
- (3) P. Boutellier : La Révolution française de 1848 vue par les Hongrois. (P. U. F. 1952)
- (4) Th. Schneider : Das Problem der Revolution im 19 Jahrhundert. [Hist. Zschr., Bd. 170. Heft. 2, 1952]
- (5) P. Robertson : Revolution of 1848. (Princeton University Press, 1952)
- (6) A. Arnengand : A propos d'un centenaire. Coup d'Etat et plebscrite dans le département du Tam. (Ann. du midi, no. 1, 1952)
- (7) M. B. Allen : P. J. Proudhon in the Revolution of 1848. [Jour. Mod. Hist., Mars, 1952]
- (8) P. Andréani : La formation du parti radical-socialiste. [Rev. polit. et parl., Jan., 1952]
- (9) J. Bruhat : Histoire du mouvement ouvrier français. (1952)
- (10) G. I. Dickinson : Revolution and Reaction in Modern France. (1952)
- (11) F. O. Martin : L'inconnu, Essai sur Napoléon Bonaparte. (1952)
- (12) R. Garandy : Les sources françaises du socialisme scientifique.

(Éd. Hier et Aujourd'hui, Collection civilisation française. 1952)

- (9) G. Cogniot : La réforme scolaire en 1848 et la loi falloux (ditto. 1952)

又、百年記念に出版された次の三刊行物は既に我が国に輸入されてゐる。

- (1) Actes du Congrès historique du Centenaire de la Révolution de 1848. (Presses Universitaires de France, 1948)

- (2) 1848 et les Révolutions du siècle XIX. (1948-1953)

- (3) Collection du Centenaire de La Révolution de 1848. (P. U. F. 1948)

(a) Jean Bruhat : Les Journées de Février, 1848.

(b) Jean Cassou : Le Duarante huitard.

(c) Henri Guillemin : Lamartine.

(d) E. Tersen : Le Gouvernement provisoire et l'Europe.

(e) Paul Bastid : L'avènement du suffrage universel.

(f) Sylvain Molinier : Blanqui.

(g) Jean Vidalence : Louis Blanc.

(h) Robert Schnerb : Ledru-Rollin.

(i) Mlle Edith Thomas : Les femmes en 1848.

(j) Armand Guvillier : P.-J.-B. Bachezet et les origines du socialisme chrétien.

(k) Édouard Dolléans et J.-L. Puech : Proudhon et la Ré-

volution de 1848.

(l) Auguste Cornu : Karl Marx et la Révolution de 1848.

(m) Pierre Angrand : Étienne Cabet et la Révolution de 1848.

(n) Ch. Schmidt : Des ateliers nationaux aux barricades de juin.

(o) Pierre Chanu : Eugène Sue et la Seconde République.

(p) Felix Armand : Les Fouriéristes en 1848.

(q) Gaston Martin : L'abolition de l'esclavage.

(r) Georges Duveau : Raspail.

(s) Georges Duveau : La littérature ouvrière.

近、雑誌に刊行された「1848年フランス文藝の生誕とその歴史」は、その原の複製。

- (1) J. Lincas-Dubreton : The Restoration and the July Monarchy. (tr. by E. F. Buckley, 1929)

(2) R. Armand : The Second Republic and Napoleon III. (tr. by E. F. Buckley 1930)

(3) E. W. Latimer : France in the Nineteenth Century. (1890-1890) (1895)

(4) Apponyi : Journal (Vol. IV, 1926)

(5) L. Blanc : Histoire de la Révolution de 1848. (2 vols., new ed.) (1880, Vol. I)

(6) M. du Camp : Souvenirs de l'Année 1848. (1876)



- (7) A. Crenieux : La Révolution de Février. (1912) (en biblio-graphie)
- (8) Garnier-Pagès : Histoire de la Révolution de 1848. (5 vols., 1861)
- (9) La Hodde : La Naissance de la République en Février, 1848. (1850)
- (10) Lamartine : Hère de la Révolution de 1848. (2 vols., 1819)
- (11) Lemoine : Abdication de Louis-Philippe Racontée par Lui-même. (1851)
- (12) Princesse de Ligne : Souvenirs. (Brussels, 1923)
- (13) I. Ménard : Prologue d'une Révolution. (1849)
- (14) de Normanby : Une Année de Révolution. (2 vols., 1859)
- (15) E. Peltan : Histoire des Trois Journées. (1848)
- (16) Proudhon : Correspondance. (4 vols, 1875) (vol. II)
- (17) Saint-René Taillandier : Les souvenirs du Conseiller de la Reine Victoria. (Revue des Deux Mondes, 1877)
- (18) D. Stern : Histoire de la Révolution de 1848. (3 vols., new ed., 1878, vol. I)
- (19) Tocqueville : Souvenirs. (1898)
- (20) Vétou : Mémoires d'un Bourgeois de Paris. (6 vols., 1853-65) (Vol. V)
- (21) D. de Hauterame : Histoire du gouvernement parlementaire en France de 1814 à 1848. (10 vols., 1857-72)
- (22) Thureau-Dangin : Royalistes et républicains. (2nd ed., 1888)
- (23) Bourgain : L'Église de France et l'État au XIXe siècle. (2 vols., 1901)
- (24) G. Brunet : Le mysticisme social de Saint-Simon. (1925)
- (25) S. Charlety : Histoire du Saint-Simonisme. (1896)
- (26) Levasseur : Histoire de la classe ouvrière et de l'industrie en France de 1789 à 1870. (2 vols., 1903)
- (27) Dayot : Journées révolutionnaires, 1830-1848. (non date)
- (28) A. Bardoux : La bourgeoisie française. (1893)
- (29) D. Halevy : Le Courrier de M. Thiers. (1921)
- (30) de la Hodde : Histoire des sociétés secrètes et du parti républicain de 1830 à 1848. (1850)
- (31) Tchernoff : Le parti républicain sous la Monarchie de Juillet. (1901)
- (32) Lamartine : La France Parlementaire. (4 vols., 1864-65)
- (33) M. Levaillant : Lamartine. (1925)
- (34) Duentin-Bauchard : Lamartine homme politique. (1903)
- (35) L. de Ronchand : La politique de Lamartine. (1878)
- (36) E. Lavisse : Histoire de France contemporaine. (1922)
- (37) L. Abensour : Le féminisme sous le règne de Louis-Philippe et en 1848. (1913)
- (38) Ch. Seignobos : Histoire politique de l'Europe Contemporaine. (1924)